

研究ノート

果たして昔に比べ生徒の進路意識は変わったのか

研究開発部評価・追跡研究部門 鈴木 規 夫
 研究開発部進学適性部門 椎 名 久美子
 研究開発部評価・追跡研究部門 石 塚 智 一
 研究開発部進学適性部門 柳 井 晴 夫

1 はじめに

学校歴、偏差値、輪切り、ランキング、合格可能性などの言葉で象徴される現在の入試は、進路選択をする上で避けては通れないハードルとなって、様々な形で生徒の意識に入り込んでいく。個々によって考え方は違うにしても、「入試は一生の重大事」「偏差値の高い大学は良い大学」といった考え方はかなり多くの人に是認されてきた。また、学校卒業後に社会に出てからも何らかの形でそのことについて痛感される方も多いのではないと思う。

このような進路選択において形成された代表的な意見が、ここ10数年の間で変化が生じたのではないだろうか。というのが本研究の出発点であった。学習指導要領の改訂に伴い、「新しい学力観」「個性重視」「多様な学力」を目指した新しいカリキュラムの編成も進行し、いよいよ今年の春（平成8年4

月）からは最終段階である高校3年生にも行き渡ることになる。こういった新しいカリキュラムは、進路選択という側面からみると、学力重視の進路展望から個々の特性を考慮した適性重視の進路展望への変化を積極的に押し進めるシステムと考えることができる。

また、いまだ脱出しきれていない経済不況による就職難の影響や若年層の人口減少の問題は、以前では進学していなかった層までをも取り込むことになり、考え方や価値観について一層多様化を生み出しているのではないかと考えることもできる。

果たして、実際に生徒にそのような教育や社会情勢の変化が進路に関する考え方や価値観に変化をもたらしているのだろうか。本研究では、実証的に把握するため全国の中学3年、高校1年、2年、3年の生徒及び社会人を対象にして、進路に関する考え方や価

値観についての調査を実施することにした。ここでは、生徒及び社会人に共通な項目の一部について分析した結果を報告する。

2 調査項目の作成と調査の実施

アンケート調査にさきがけ、進路に関する考え方や価値観について最近10数年の間に変化が見られたものを、生徒と直接接しておられる中学及び高校の進路指導の先生方約600人から自由な意見として述べてもらった。我々は、それらの意見を取りまとめて、アンケート調査実施可能な形式の項目に直

して、4段階評定（1：あてはまらない 2：あまりあてはまらない 3：ややあてはまる 4：あてはまる）による調査表を作成した。項目内容は大きく分けて、生活、学習、進路、生き方の4つに大分類し、大分類をさらに中分類、小分類と細分化していき、最小単位の小分類では数個の項目が含まれるよう設計した。

ここでは、そのうち、小分類の「入試・学歴観」「進路展望」「職業観」「生き方」及び「成績認知」に関連する項目を取り上げることにした（表1）。

分析の目的は、従来から言われてい

表1 進路に関する考え方や価値観に関連した項目

- | |
|---|
| <p>〔入試・学歴観〕</p> <p>1. 入学試験は、一生を左右する重大事だと思う（思った）</p> <p>2. 偏差値の高い大学は良い大学だと思う（思った）</p> <p>3. これからの（今の）社会は学歴よりも実力だと思う（思った）</p> <p>〔進路展望〕</p> <p>4. 学力よりは、興味・関心を重視して将来の進路を決めたい（決めた）</p> <p>5. 進学または就職先としては、自宅から通えるところを選びたい（選ぶのが良いと思った）</p> <p>〔職業観〕</p> <p>6. 「はなやかな職業」よりも「地味な職業」の方がわたしにはむいている（と思った）</p> <p>7. 「収入が少なくても興味もてる仕事」よりも「興味もてなくても収入の多い仕事」の方を選びたい（と思った）</p> <p>〔生き方〕</p> <p>8. 自分の好きなことであれば、苦しくてもやり通せると思う（思っていた）</p> <p>9. 「夢や希望を実現するために努力する」よりも「今が楽しければよい、あとはなんとかなるさ」という生き方の方が、わたしにはむいている（と思った）</p> <p>〔成績認知〕</p> <p>10. 「努力しないで成績がよい人」よりも「成績が悪くても努力する人」の方がえらいと思う（思った）</p> |
|---|

るような進路に対する考え方や価値観に意識構造の変化が見られるか否かであった。このため質問では、生徒の場合、「今の気持ちに最も当てはまるもの」を選択させる方法を取り、社会人の場合、「18歳時における気持ちに最も近いもの」を選択させる方法をとった。表1の()内は社会人についての回答を求めたときのワーディングを示している。

<生徒調査>

中学3年、高校1年、2年、3年の連続した学年を対象にして、1校から1学年1クラス分(40名)の調査を依頼し、全国を7ブロックに分け、その中からランダムに学校を抽出して平成7年7月に調査を実施した。その結果、生徒については、700校のうち約80%に当たる573校(22,059人)から回答を得た。

<社会人調査>

18歳から60歳までの社会人(大学生も含む)を対象にして調査を行った。調査は調査会社に依頼し、性別、年代構成、都市規模などを考慮して平成7年11月に全国調査を実施した。その結果、1,832人から回答を得た。

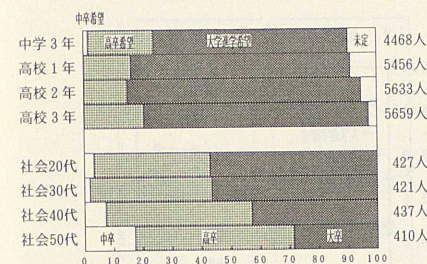
なお、調査において欠測値は分析の対象から除外した。

<調査対象者の特徴>

まず、どのような集団を分析対象にしたかを述べておく。図1は、20歳以下の社会人を除いた各年代における回答者の学歴構成状況を示したものである。ここで言う学歴とは、生徒の場合、本人が進路志向として「中学を卒業して就職を希望する者」を「中卒希望」、「高校を卒業して就職を希望する者」を「高卒希望」、「大学(短大・専修学校を含む)へ進学を希望する者」を「大学進学希望」として表している。また、「進路が決まっていない」と回答した者は「未定」として表してある。社会人の場合、「中学を卒業して就職した者」を「中卒」、「高校を卒業して就職した者」を「高卒」、「大学(短大・専門学校を含む)を卒業して就職した者」を「大卒」として表している。この図をみると、生徒については、「高卒希望」が20~30%、「大学進学希望」が70~80%で推移しており、学年を問わず安定した状況にある。「進路未定者」が一部いるが、それも学年進行とともに減少し、進路選択に対する意識の形成状況がよく現れた結果を示している。

一方、社会人については、20代や30代では「大卒」が60%を占めていたのが年代が上昇するに従って減少し、逆に「中卒」及び「高卒」者の割合が増加する構成となっている。

図1 回答者の学歴構成



(注) 生徒は平成7年7月時点での進路希望を示す

3 結果と考察

【入試・学歴観】

調査にさきがけ進路指導担当の先生に行った自由記述の中で、進路意識について次のような意見が寄せられている。「昔のように何が何でも“この学校へ”という意識が薄れ、“入れるところならどこでもよい”という気持ちの生徒が増えた気がする」「伝統校ではあるが、年々学校歴という意識は薄くなっているような気がする」「昔に比べ高学歴に対する志向は強いが、自らの力で切り開くというよりは、自分の力を判断されたがっており、あきらめに近い形での安全志向が強い」などが、多くの先生から述べられていた。これらの意見から類推すると、今の生徒は学歴や学校歴に対する考え方や進路意識などで変化が見られるようである。

果たして、そのような変化が実際に生徒自身の意見として見い出されるのだろうか。図2の項目1~項目3は、入試及び学歴観について質問したもの

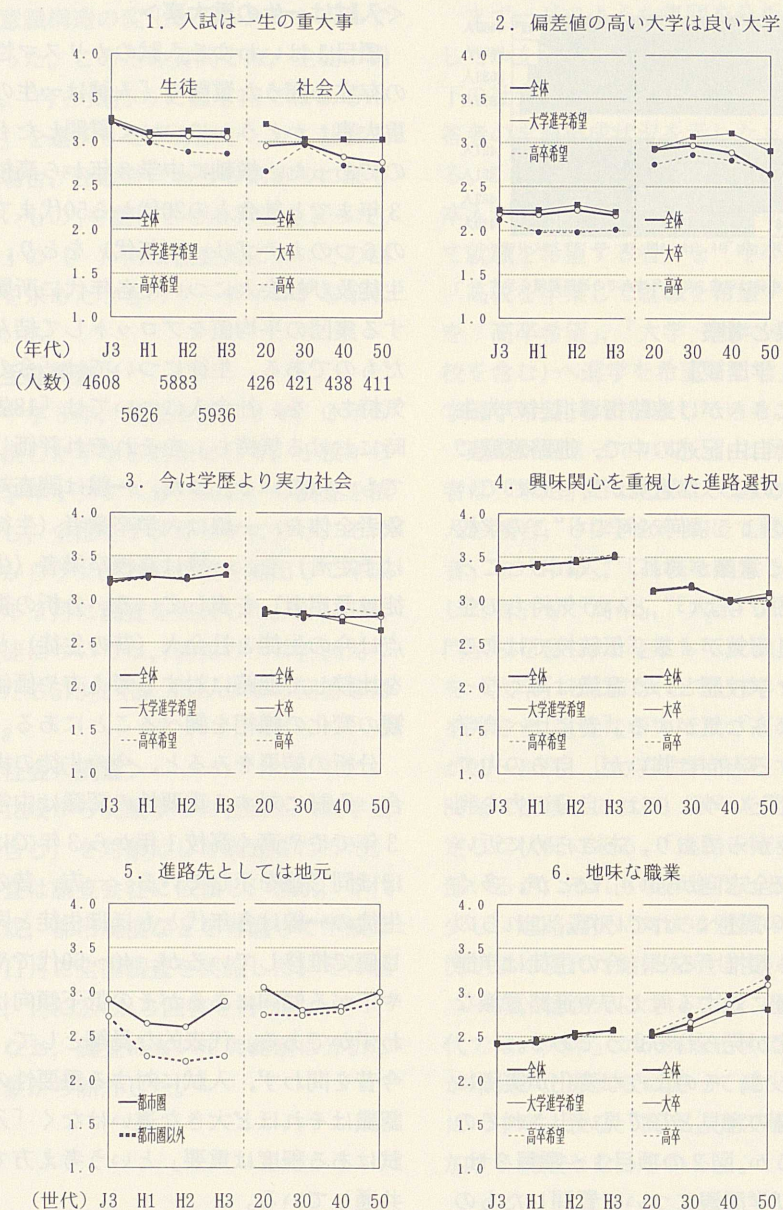
である。

<入試は一生の重大事>

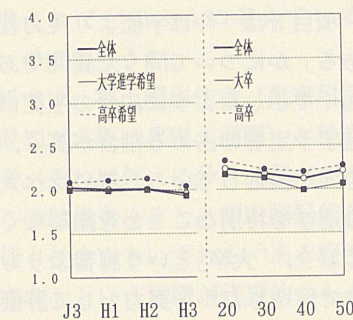
項目1はいわゆる入試のカリスマ性の存在を問うた質問で「入試は一生の重大事」かどうかについて質問したものであった。横軸に中学3年から高校3年までと社会人の20代から50代までの6つのカテゴリー(年代)を取り、生徒及び社会人について各年代に所属する集団の平均値をプロットして結んだものである。生徒については「今の気持ち」を、社会人については「18歳時における気持ち」をそれぞれ評価してもらっている。また、一線は調査対象者全体を、二線は大学卒業者(生徒は予定者)を、三線は高校卒業者(生徒は予定者)を表している。分析の視点は今の生徒と社会人(昔の生徒)とを比較して進路に対する考え方や価値観の変化の様相を調べることにある。

分析の結果をみると、今の生徒の場合、入試に対する重要性の認識は中学3年でやや高く高校1年から3年ではほぼ同じ値を示している。一方、昔の生徒の一線は各年代ともほぼ生徒と同じ値で推移しているが、40~50代でやや下がる傾向にあるがその低下傾向はわずかである。代表的な見解として、今昔を問わず、入試に対する重要性の認識はそれほど大きな違いはなく「入試はある程度は重要」という考え方で共通している。

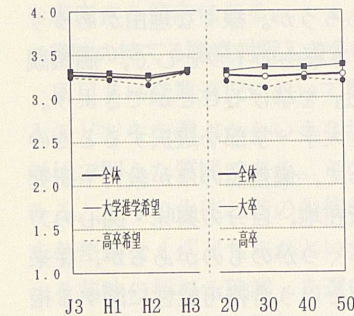
図2 進路に対する考え方・価値観に関する評価結果



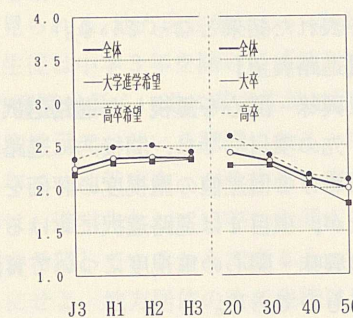
7. 興味をもてなくても収入の多い職業



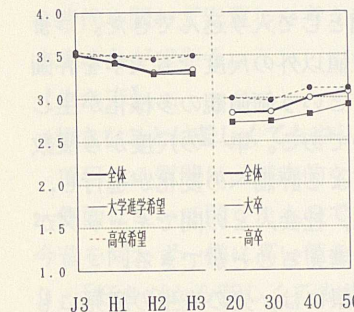
8. 好きなことは苦しくてもやり通せる



9. 「今が楽しければよい」という生き方



10. 「成績が悪くても努力する人」はえらい



なお、学歴別にみた場合には、大卒者(大学進学希望者)に比べ高卒者(高卒希望者)の入試の重要性に対する認識はやや低い傾向にあり、わずかながら意識の違いが見られる。

<偏差値の高い大学は良い大学>

項目2は「偏差値の高い大学は良い大学」という質問で、偏差値と良い大学との関連について問うたもので、いわば学校の偏差値によるランキングの考え方を問うている。

結果をみると明らかなように、今の生徒と昔の生徒の間で大きなギャップが見られた。今の生徒は一律に低い数値を示しており、昔の生徒は50代でやや下がるが各年代とも今の生徒に比べ高い数値を示している。今の生徒の意識としては、偏差値の高い大学が必ずしも良い大学とは思わない傾向にあり、昔に比べて偏差値による学校の序列意識が薄れてきていることが分かる。では、どうしてこのようなギャップ

ブが今の生徒と昔の生徒との間で生じたのであろうか。様々な理由があろうが、主たる理由の1つとして、「価値観の多様化」を挙げることができよう。一般に、大学・学部を選択するときの要因として、偏差値のほか教育や研究内容、所在地、自分の興味・関心の方向などいくつかのものがあるが、従来は偏差値という合格可能性に関する指標だけが重視される傾向にあった。しかし、今や様々な要因が進路決定の重要な要因として入り込んできた。つまり、「偏差値以外の尺度でも大学を評価したい」という価値観の多様化が生じてきたのである。単一の尺度から複数の尺度による評価への変化が進行し、その結果、社会人との間でギャップが生じたと考えることができる。

この背景には、先の先生の意見にもあったように、生徒の意識の中には高い目標を掲げて自らの力で切り開くよりも、自分の興味・関心に沿ったところであればほどほどのところでよいといった安全志向的意識が強まり、偏差値による序列化にあまり関心が向かなくなったことも起因しているであろう。また、学力を中心とした一般入試制度に加えて推薦入学制度も拡大され面接や高等学校の調査書が重視されるようになり、入試における合否判定基準が多様化していることも影響しているであろう。

＜今は学歴より実力社会＞

項目3は「今は学歴より実力社会である」かについて問うた質問である。図1で示したように、今の生徒は大学進学予定者の占める割合が高く、大学志向が浸透している。昔に比べ大学への進学を特別なことと意識しなくなっており、「大卒」という肩書よりも、大学で何をしたかを実力として評価してほしいと考えているのではないだろうか。今と昔の生徒の考え方の推移がよく表れた結果となっている。

【進路展望】

＜興味・関心を重視した進路選択＞

先の項目2では、間接的に進路選択における偏差値の重視度の評価を行ったが、項目4は進路選択における自分の興味・関心の重視度について質問したものである。

結果は、図に示すとおりで、今の生徒は昔に比べ興味・関心を重視する考え方はより強くなっていることが分かる。項目2との関連からみると、偏差値重視から個人の興味・関心重視の進路展望へと移行しているのが今の生徒ということになる。

＜地元志向＞について

項目5は、自宅から通える範囲内で進路先を決定するか否か、いわゆる「地元志向」を念頭において作成された質問である。都会から地元へ帰って就職するUターンという言葉が聞かれて久

しいが、初めて進路を決定する時点では、果たしてどのように考えている(た)のであろうか。

分析では、都市圏居住者(東京周辺及び愛知、大阪、兵庫、福岡)と地方居住者(それ以外)に分けて調べてみた。この結果をみると、都市圏居住者は生徒も社会人もいずれも「ある程度地元志向」という意識が代表的なものとなっている。これに対し、地方居住者は今の生徒と昔の生徒の間でギャップが見られる。地方居住者については、今の生徒は中学3年を除いて「地元志向」の意識は低く、逆に昔の生徒は「ある程度地元で」という意識にある。中学3年で「地元志向」がやや高く表れたのは、進学先として自宅から通える高校を希望しているからであろう。いずれにせよ、地方居住の今の生徒は昔に比べ居住地外の進路先に通うことを意識する傾向が強くなっていることが分かる。

【職業観】

＜華やかな職業対地味な職業＞

「ファッション性の豊かなライフスタイル」「趣味のない没个性的なライフスタイル」といった生徒の生活に関する特徴を挙げる先生が多かった。この特徴は、項目6で挙げたアンケート結果にも直線的な上昇傾向としてよく表れているようである。年代が若いほど「華やかな職業」にあこがれる傾向が

強く、年代が古いほど「地味な職業」を志向する傾向にある。

＜興味の持てる職業対収入の多い職業＞

項目7は職業選択において興味と収入のどちらを選ぶかという2者選択の対比で問うた質問である。この結果をみると、今の生徒と昔の生徒の間であまり差がなく「どちらかといえば収入より興味の持てる職業」を選びたいというのが代表的な意識となっている。この2者選択からみた職業観については時代を問わず安定した考え方と解釈することができる。

【生き方】

＜好きなことは苦しくてもやり通せる＞

項目8の質問は、基本的な生き方の一側面について問うたものであるが、今昔を問わず一様に高い値を示しており、「好きだから苦しくてもやれる」という考え方が各年代とも主流となっている。

＜堅実主義対刹那主義＞

項目9の質問も、生き方についてどのような意識を持っているかを問うたものである。いわゆる、将来のことを考えて堅実に努力する姿勢が強いかに今の時点の楽しさ追求の姿勢が強いかのいわゆる堅実主義志向対刹那主義志向について問うている。この結果をみると、今の生徒については各学年とも堅実主義と刹那主義の中間の「どちらともいえない」という考え方が代表

的なものとなっており、昔の生徒については、年代が進むにつれ「どちらともいえない」から「堅実主義」的な考え方に移行する傾向が見られる。昔に比べ今の生徒は刹那主義的志向が強まったと言える。

【成績の認知】

項目10の質問は、成績という1つの能力評価尺度と努力との関連をどのように捉えているかを問うたものである。一般に努力は大切なことだと教えられてきている。果たして、そのような努力崇拝が成績との関連で存在するのであるか。このような疑問から、あえて、「努力しないで成績がよい人」と「努力しても成績の悪い人」との対比で努力崇拝の是非について問うてみた。

結果をみると、今の生徒は各学年とも高い値で推移しており、「努力」という言葉の持つ意味が重いことが実感させられる。一方、昔の生徒は今の生徒に比べやや低い。社会的経験がこの項目については影響しているかもしれないが、昔の生徒の方がさめた見方をしている。

4 まとめ

今の生徒と昔の生徒（社会人）に共通な10個の項目によって、進路意識や職業観などについて検討を加えてみた。その結果、いくつかの項目は年代

を問わず安定した意識構造として引き継がれているものもあり、一方、今の生徒と昔の生徒の間で変化を生じた項目もあった。

安定した意識構造としては、項目1「入試は一生の重大事＝入試のカリスマ性」という意識は相変わらず年代間で変わらぬ高い評価が与えられていた。また、項目7「興味が持てなくても収入の多い職業」を選択するという職業選択意識や項目8「好きなことは苦しくてもやり通せる」といった考え方なども年代間で安定した意識構造であった。

一方、今の生徒と昔の生徒の間で大きなギャップのあった項目としては、項目2「偏差値の高い大学は良い大学」といった偏差値による大学のランキング意識や項目4「興味・関心重視の進路選択」などがあった。そこで表れた生徒の意識の違いは社会の変化を敏感に捉えた形で表れており、「偏差値志向から個人の興味・関心重視の進路展望」が主流となりつつあることを示している。その背景には項目8「学歴社会より実力社会」という意識の変化も見逃せない。

また、意識構造として年代間で徐々に変化していつている項目もあった。項目6「地味な職業」といった職業選択意識や項目9「今が楽しければよい」という考え方などである。これらの質

問については、年代間で徐々に変化している様子が伺える。古い年代ほど「地味・堅実的」な志向が強く、年代が若くなるにつれ「華やかさを求め刹那的」な志向が強くなってきている。これは、それぞれの年代の18歳時の「時代」を反映しているものであろう。生徒と社会人を対象にして意識の変化の様相を調べてきたが、その中で進路意識は偏

差値中心から個人の興味・関心重視の進路展望へと着実に変化しつつあることが分かった。このような状況の中では、より一層生徒自身の責任が問われることになる。そのためには生徒と教師や親との間で緊密な関連を保ちながら、今まで以上に変化に対応した個々に即したきめ細かな援助体制が望まれよう。